

# 『蜻蛉日記』に見られる作者の生き方について

保 澤 奈 津

## 目 次

はじめに

第一章 『蜻蛉日記』の成立

——道綱母の日記執筆の動機——

第二章 『蜻蛉日記』における「ものはかなさ」の感情

第三章 道綱母の宗教への接近

第四章 道綱母の愛のかたち

おわりに

はじめに

日記、そこには自分自身の世界が開けている。そこには功利的なものがない。そして日記というものは、単なる記録ではなく、実体験や事実を書いていくことによって、自己を客観視し、内面的世界を構き上げることができる。

私が『蜻蛉日記』に心をひかれたのは、二年生当初の『王朝女流文学史』の講義であった。「王朝女流文学」という言葉から、美し

く華やいだ夢のような世界を想像していた私だったが、決してそうではないことがわかった。当時の女性の閉ざされた運命を語ったもので、その運命を超えていくために、彼女らは「文学」へと解決の方向を見いだしていったのである。

その中で『蜻蛉日記』は、私の心の中で染み透るような強烈な印象を与えてくれた。それは、とりわけ作者である道綱母の愛情の強さが王朝女流作家の中でも秀でていたうえに、何といっても、リアルで自然で、人間くさい作品であることが時代の懸隔を感じさせない、という点である。私は同じ女性として、王朝時代に生きた作者道綱母の真実の生きざまを理解することにより、それが何らかの形で私の人生にもプラスの面を与えてくれればすばらしいことだと思っている。

『蜻蛉日記』は上・中・下の三巻から成るが、私はその中から主に道綱母の、藤原兼家との愛の道程を辿ってこの論文を次のように展開していきたいと思う。まず第一章では、道綱母がどうして身の上を暴露するような日記を執筆する気になったのか、ということと、いろいろな文献を参考にして解明していきたい。第二章では、兼家との結婚を通して生まれた「ものはかなさ」の感情について述べ

る。第三章では、「ものはかなさの」の解決の方法を解明し、第四章では、道綱母が愛に悩んだ魂の真実を追求していききたい。

なお、原文はすべて、角川文庫『蜻蛉日記』（楠本綏校注）から引用した。（）内は、そのページ数である。

## 第一章 『蜻蛉日記』の成立

### ——道綱母の日記執筆の動機——

『蜻蛉日記』は、天曆八年（九五四）から天延二年（九七四）にわたる二十年間の記事が見られるのであるが、その執筆が天曆八年の時点における心境の記述でないということは、多くの研究家が既に説いている。また、成立年代についても種々の説があるとされている。私は本章では、

あるかなさかの心ちするかげろふの日記（八八頁）  
を書こうと、作者道綱母に決意させた動機は何であったのかを主に  
追求していくことにする。

かくありし時過ぎて、世の中に、いとものはかなく、とにもか  
くにもつかで、世に経る人ありけり。（一三頁）

これは序文の冒頭の部分である。ここにはっきり日記の内容が、作者の現在の境涯ではなく、過去の半生の回顧であることが記されている。

それでは、一体、述作の目的は何であったのだろうか。序文に次のような部分がある。

人にもあらぬ身の上まで日記して、めづらしきさまにもありな

む、天下の人の、品たかきやと、問はんためしにもせよかし、  
……（一三頁）

また「第七二段」の安和の変で、源高明の配流の時に、

身の上のみする日記には、入るまじきことなれども、かなし  
と思ひ入りしも誰ならねば、記し置くなり。（九三頁）

とある。ここで、作者自身の身の上を語ることにあったということがわかる。それは、自分のためだけではなく、明らかに読者が予想されている。そのことについて野村精一氏は『かげろふの終焉』の中で、「読者に対する意識的なポーズを以て、おのれ自身の書き上げた自己の姿を、すなはちこの蜻蛉日記と云ふ作品を、古代社会一般に対して烈しく投げつけたものだ。」（二二頁）と述べられている。道綱母は、自己の生き方に何らかの意義を見いだしていたとは考えられない。

それではなぜ、取るに足りぬと自覚している身の上を語ったのであろうか。

世の中に多かる古物語の端などを見れば、世に多かるそらごと  
だにあり、人にもあらぬ身の上まで日記して、めづらしきさま  
にもありなむ（一三頁）

というように作者は、日常の「つれづれ」をなぐさめる目的で作られた「古物語」には、「そらごと」が多く混っており、その興味の中心が、「そらごと」でもって作られていることに気づいたから、「古物語」では物足りなくなり、作者の心にふれるものでなくなっていたのである。そこで「身の上」を偽らず告白して、人生の真実について考えようとする点に興味の中心がおかれている「日記」を

思いついたのだろう。「人にもあらぬ身の上」を日記に書けば、「物語」とは違った「めづらしい」作品となるであろうと思いついたことが、一つのきっかけになっているのだと思う。

次に、そのことを文学史的に考察してみたい。川口久雄氏は『蜻蛉日記』の史的意義とその影響』の中で、「かげろふ日記以前の女性たちの多くは、自らの感動を抒情詩としてうたいあげることができても、自らの生活体験の内部のくまぐまを散文として記述することを知らなかったようである。」(三五頁)と指摘され、さらに、「こういう作品を可能ならしめたのは時代の風潮である。(中略) 変革的な時代社会の意識をいち早く敏感に先取り形象化したのだともいえる。」(四〇頁)と述べられている。この説から、時代背景も『蜻蛉日記』の成立に何らかの形で関係しているという見方をすることができよう。

さらに、上村悦子氏が『蜻蛉日記』作者・成立・伝本』の中で、直接の契機の一つは、「作者が兼家の妻として、時姫と並称される身でありながら、心秘かに期待し切望していた新築の東三条邸に迎え入れられなかったことである。」(一四七頁)点を挙げられている。それは、「第二〇三段」の兼家との文通において、兼家が作者に、

助は、いかにぞ。ここなる人は皆おこたりにたるに、いかなれば見えざらむ、と、おぼつかなきになむ。いと憎くし給ふれば、疎むとはなくて、いどみなむ過ぎにける。忘れぬことはありながら。(二五七頁)

と言っているところである。「ここなる人」というのは時姫の腹の子供たちであろう。そして、もう一つの契機としては、「近江(藤

原国章女)に兼家を通い出し、三十日四十夜足が絶えたことによるショックが大きかったことである。」(一四七頁)と述べられている。

これらのことにより、日記執筆を思いついた作者は、書くことによつて苦悩の幾分かは消化されると考え、さらに自らの運命を捉え直し、そして新しい生の意味を見いだしていったのである。

## 第二章 『蜻蛉日記』における「もはかなさ」の感情

道綱母は、天曆八年の秋に藤原兼家と結婚した。兼家は二十六歳、作者は十九歳ぐらいであった。しかし、兼家には既に時姫という妻があり、男児(後年の道隆)も生まれていたが、一夫多妻という古代的な風習の中に生きねばならぬ女性としての宿命である。その一夫多妻の風習をよいことにして、色好みの道にかけて手だれの兼家は、他にも幾人かの妻妾を持っていた。作者は、天曆九年八月に、第一子道綱を出生したが、その翌日に兼家が関係した町の小路の女の存在が発覚する。「第二段」に、

さて、九月ばかりになりて、出でたるほどに、箱のあるを手ま さぐりにあけて見れば、人のもとにやらむとしける文あり。(二三頁)

これによつて、兼家に凜然と感じていた不安は現実となり、夜離れに不審をいだいた彼女は、人に兼家の後をつけさせ、町の小路に住む女に通つていふことを突きとめる。そこで、「第三段」

さればよと、いみじう心憂しと思へども、いはむやうも知らで

あるほどに、二三日ばかりありて、暁方に、門をたゞく時あり。さなめりと思ふに、憂くて、あけさせねば、例の家とおぼしき所に物したり。つとめて、直もあらじと思ひて、

嘆きつゝ独り寝る夜のあるまは

いかに久しきものとかは知る

と、例よりは、ひきつくりろひて書いて、うつろひたる菊に挿したり。(二四頁)

このように兼家に直接感情をぶつけた歌を贈っている。この歌は、小倉百人一首にも採られている有名な歌である。兼家の心が遠くなつてしまった悲しさを表しているようではあるが、彼女自身の心の中は怨みの気持ちでいっぱいであり、そこに彼女の気の強さが感じられる。

しかし、兼家の方が一枚上手だった。返歌に、

げにやげに冬の夜ならぬ真木の戸も

遅くあくるはわびしかりけり

さても、いとあやしかりつるほどに、事なしびたり。しばしば、忍びたるさまに、「内裏に」など言ひつゝぞあるべきを。

いとどしう心づきなく思ふことぞ、限りなきや。(二五頁)

と、戸を開けることの遅いわびしさを認めるだけで、ひとり寝の思ひの方は避けて、うまくあしらっている。

兼家は、町の小路の女のほかに、近江という女、忠幹の娘、源兼忠の娘、村上天皇皇女保子内親王らと交渉があったという。そのために起こる道綱母への愛の喪失を意味する夜離れは、存在喪失の危機感を呼びおこし、不安、寂寥にあけられる生活を強いるばかり

か、彼女の生をも不安に突き落していくのである。この感情が「ものはかなさ」なのであろう。

旺文社の『古語辞典』によると、「はかなし」の意味は、「対象をつかみ得たのかどうかはつきりしないような頼りない感じ。何となく不安定でもうい感じ。」とある。原文より「はかなし」を追つてみると、「第一〇段」に、

こほるらむ横川の水に降る雪もわがごと消えて物は思はじ

などいひて、その年はかなく暮れぬ。(二二頁)

と、結婚した年に記している。また「三九段」においては、

さいはひある人のためには、年月見し人も、あまたの子など持たらぬを、かくものはかなくて、思ふことのみ繁し。(五四頁)

と、自分の身の上を「幸ある人」と皮肉に語っている。兼家と結婚して既に十年ほど経っているのだが、子宝に恵まれず、道綱しか生まれなかった彼女の精神的にも不安定な様子が窺える。

「第四四段」庚保二年(九六六)にも、

はかなながら秋冬も過ごしつ。

また「第五五段」の稲荷詣での折、

九月になりて、「世の中をかしからむ。物へ詣でせばや、かうものはかなき身の上も申さむ。」など定めて、いと忍び、あるところにもしたり。(七二頁)

と、はかない時の経過を見つめている。そして上巻の終わり「第六七段」において、

かく年月は積れど、思ふやうにもあらぬ身をし嘆けば、声あらたまるも喜ばしからず、猶ものはかなきを思へば、あるかなき

かの心ちする、かげろふの日記といふべし。(八八頁)

と締めくくっている。「思うようにならぬ身の上」を嘆き、「はかない身の上」をなおも思い続けると、あるかなきかの「かげろふ」のようなはかない気持ちがある、というので、自らを「かげろふ」に託しているである。そして日記の書き出しにも、

世の中に、いとものはかなく、ともかくにもつかで、世に經る人ありけり。(一三頁)

と、自らを規定しているように安定しない境涯に立っているのである。

菊田茂男氏は『蜻蛉日記の世界』の中で、「ものはかなき」は作者の生を根柢において支えている一つの「頼り所」を失おうとして、然もなお他の「頼り所」を得る見通しのない「ともかくにもつか」ない状態の感情である。換言すれば、それは「頼り所」が失われ、或は失われようとする危機の予想による衰滅への意識に胚胎する悲歎・不安・恐怖・怨恨等の複合感情である。(二一四頁)と説明されている。また、『王朝女流文学史』の講義において、清水

文雄先生から「ものはかなき」とは、自己の生の空虚の意識であり、存在壊滅への恐怖の意識である。(七七頁)と教えていただいた。「ものはかなき」という感情を、実にうましく分析し、説明されていると思う。道綱母は、夜離れがあっても兼家を失ったわけではない、ただ、喪失の予感におびえる時に、その極度の緊張の中に生じてくる感情なのだと思う。

「五四段」に、

例ならぬ程になりぬれば、あなものをぐるほし。たはぶれごとと

こそ、われは思ひしか、はかなき仲なれば、かくてやむやうも  
ありなむかしと思へば、(略)(七一頁)

「はかなき仲なれば」と、兼家との夫婦仲が頼りないと述べているように、彼女の生の支えをむしばむものは兼家だけのように思われるが、実は彼ばかりではなかった。それは、精神的「頼り所」である血縁者達との別離によっても生じたようである。「第八段」において、受領である父倫寧が国司となつて奥州へ赴任するため離京せねばならないという時、

わが頼もしき人、みちのくにへ出で立ちぬ。(二〇頁)

精神的な支えであった「わが頼もしき父」との別れは、彼女に寂寥感や孤独感を与えた。さらにまた、庚保元年(九六四)の初秋には、実母の突然の死にであうのである。その時の彼女の心情が、「第四〇段」に巧みに描写されている。

さらにせむかたなくわびしきことの、世の常の人にはまさりたり。あまたあるなかに、これは、遅れじくとまどはるゝもしるく、いかなるにかあらむ、足手など、たどすくみにすくみて、絶え入るやうにす。(五四頁)

彼女の悲嘆は限りないものであった。ついで庚保二年九月、姉(為雅妻)までが、夫と共に遠国へ赴任することになった。「第七四段」には、

かくて、あまたあるなかに、頼もしきものに思ふ人、この夏より、遠くものしぬべきことのあるを(略)(六二頁)

と記し、かくて彼女の身は孤独へと落ちていく。

これら諸事件の継続によって、「ものはかなき」の感情は加速度

的に進んでゆき、この「ものはかなさ」が、「もののはあはれ」や、「無常」の思想を内包する人生観につながったのではないかと思う。

### 第三章 道綱母の宗教への接近

道綱母は「ものはかなさ」の深淵から、どのように脱出していったのであろうか。当時の女性たちがするように、物語を読んだりすることもあったが、そんなことで解決が得られるものではない。彼女は、仏への帰依によって宗教的救済を得ようとしたのである。天禄元年（九七〇）、石山寺參籠の道中の様子を次のように記している。

忍びてと思へば、はらからといふばかりの人にも知らせず、心一つに思ひ立ちて、明けぬらむと思ふ程に出で走りて、賀茂川のほとりばかりなどにて、いかで聞きあへつらむ、追ひて物したる人もあり。有明の月は、いとあかけれど、会ふ人もなし。

河原には死人も臥せりと見聞けど、恐しくもあらず。「第九二段」（二二〇頁）

途中、賀茂の川原で、「死人も臥せり」という噂を聞いても恐ろしいとも思わないほどのひたむきな気持ちが見える。それは、兼家との仲を断念して出家しようとしたからであろう。同じく「第九二段」に、

二なく思ふ人も、人目によりて、とどめ置きてしかば、出で離れたるついでに、死ぬるたばかりをもせばやと思ふには、ま

づこの絆おぼえて、恋しう愛し、涙の限りをぞ尽くし果つる。  
（二二三頁）

わが子道綱を気にしながらも、「死」を口にしている。そして、天禄二年の六月に鳴滝の山寺へ籠ったのである。そのきっかけは、彼女自身の兼家へ書き送った書簡に、

身をし変へねばとぞいふめれど、前渡りせさせ給はぬ世界もや  
あるとて、けふなむ。これも、あやしき問はず語りこそな  
れ。「第九二段」（二四二頁）

とあるように、兼家の「前渡り」に原因があるようだ。ここでも「死んでしまいたい」と思う気持ちがありながら、一子道綱の将来のことが思われて踏みきることができなかった。

この点彼女にとって宗教への接近には、常に「現実」が頭の中をかすめていたように思われる。現実苦からの一時的な逃避であったとも言えるもので、純粹な道心に発するといふものではなかった。鳴滝の參籠も、二十一夜二十日間で、兼家に連れもどされている。兼家はその彼女に対して、

山籠りののちは、「あまがえる」といふ名を付けられたりければ（略）「第一三七段」（二七九頁）

出家しそこなつて帰った「尼還る」を、「雨蛙」にかけてあだ名をつけたのである。兼家は、彼女の感情を無視して面白がっているようだが、このことは、彼女の宗教的到達点の限界を示すものではないかと思う。

物語でや參籠の通りの沿道の風景が、実に精細に描かれ、また、外界の出来事や人物にも関心をもって記され、そうしたおりの彼女

はとても生き生きと感ぜられる。それは、庶民の生活から隔離されていただけに、彼女の眼に触れるものはずべて新鮮に眺められ、それだけでも苦しい心が紛れたのではないかと思う。そして、宗教の世界への接近によって得られたこの清新な自然は、硬直した彼女の感情をとぎほぐし、かえって兼家への新鮮な愛情を燃え立たせることになったように思われる。結局、道綱母は、兼家なしには生きてはゆかれぬことがわかったのである。

#### 第四章 道綱母の愛のかたち

以上のように見てくると道綱母が兼家へ心を寄せた目的は、むしろ兼家の愛をよび戻し、現実生活の再建をはかるためであったと言えよう。彼女の兼家に対する愛情は、激しく強いものであった。『蜻蛉日記』の中で、その愛のもっとも真実な姿が、制度や風習のわくの中で精いっぱいもがいているように思われる。

彼女は、純粹を愛し潔癖を貴んだ、と言われている。それは、当時のならわしとして懸想文の返歌を早急に応じるのが軽卒と見られていたとはいえ、兼家の求愛を一再ならず拒否したところからもわかる。それには、時姫という本妻がいたことも関係しているだろう。彼女が育った少女時代は、普通天曆文化と言われる国民性と女性崇拜をかかげた文化が広まっていた。この世相的な背景が彼女に影響し、高い芸術的教養と一夫一婦制の深い女性的な自覚をもった人間性を形成していったのではないかと思う。第二章で述べた「もはかなさ」は、愛の占有、すなわち夫の独占を祈る彼女であった

からこそ生じた感情と言える。このような彼女の「愛」は、どのような形となって表れたのであろうか。

「純粹愛」を欲する彼女は、結婚してからは、兼家を一日一夜も自分の傍から放したくなかったのである。結婚が成立して間もなく、

つごもりがたに、しきりて二夜ばかり見えぬほど、文ばかりある返りごとに、  
消えかへり露もまだひぬ袖のうへに

けさはしぐるゝ空もわりなし「第七段」(一九頁)

引き続き二晩訪れなかつた兼家に対し、「死ぬほどの思いで泣き明かした。」と訴えている。彼女の強い自我が窺われる。やがて兼家の夜離れが始まるが、彼女は、愛する男を自分から奪う女はすべて敵と考へても、自分がその女の敵であるとは考へていないようだ。あまりにも女性的な偏狭さのように思われるが、それが偽りのない真実の女の姿だと私は思う。

安和二年(九六九)、兼家は四十一歳、道綱母は三十四歳、道綱は十五歳になった元日、

「天地を袋に縫ひて」と誦するに、いとをかしくなりて、「さ  
らに身には、『三十日三十夜は我がもとに』といはむ。」「第六  
八段」(八九頁)

とある。「一か月のうち、一日も一夜も欠かさず来てほしい。」というのである。この歌を、道綱母の悲願であり本心であると見る説と、彼女は現状に満ち足りて、明るく笑えるほどに心に余裕をもっているので悲願ではない、とする説がある。いずれにせよ確かに新春に

ふさわしく、笑いのうちに語り合っているようだが、本心は、現実的に不可能であることを心得ていたように思われる。

兼家の愛の独占を願う道綱母であったが、彼女が安和二年閏五月に健康をそこね、兼家宛に遺言状を書いている中に、

年ごろ、御覧じ果つまじくおぼえながら、変りも果てざりける御心を見給ふれば、それ、いとよく顧みさせ給へ。(中略)

「あとには、『といなども、塵のことをなむあやまたざなる才まねよく習へとなむ、聞え置きたる』と、のたまはせよ。」(第七五

段)(九六頁)

とある。この時の彼女の気持ちは、兼家に対する感謝のような気がする。道綱を托することができるのは、父親である兼家を措いては他にないと言う、兼家の恩愛にすがって生きているという素直さが見られる。それは、彼女の、兼家に対する信頼と敬愛の情である、彼女にはこういう愛のかたちも備わっていた。

結婚十七年目、天禄二年(九七二)の元日を迎えるが、兼家は、例年の習慣を破ってついに訪れなかった。

車の音ごとに胸つぶる。夜よき程にて、皆帰る音も聞ゆ。門のもとよりも、あまた追ひ散らしつゝ行くを、過ぎぬと聞きたびごとに、心はうごく。限りと聞き果てつれば、すべて物ぞおほえぬ。明くる日、まだつとめて、直もあらで、文見ゆ。かへりごとせず。「第九九段」(一一三二頁)

彼女は、多分寄るだろうと期待と不安で、胸をどきどきさせながら来訪を待ちわびていたが、そのかすかな希望も断ち切られた。従って兼家から手紙が届けられても返事を出さない。その気持ちはわ

からないでもない。そして二日ほど経って兼家自身が訪れて、

「心の怠りにあれど、いと事繁きころにてなむ。ようさり物せむに、いかならむ。恐しさに。」などあり。「心ちあしき程にて、え聞えず。」と物して、思ひ絶えぬるに、つれなく見えたり。(中略)石木のごとして明かしつれば、つとめて物もいは

で帰りぬ。「第一〇〇段」(一一三三頁)

彼女は、拗ねたような抗うような、自分の感情に素直とはいえない態度をとるのであるが、この愛は、求める心の逆説的表現であると言える。面と向かった時に、素直な気持ちになれないで拗ね抗うのは、極めて自然に出てしまう表情—感情的な女性の愛の変容—であり、変容せざるを得ないほどに傷つけられていた彼女のプライドであった。即ち、自我を押し通そうとする態度の表われである。

『堀辰雄の文学と蜻蛉日記』の中で、佐山済氏が次のような説明をされている。「日記の作者が兼家の不誠実な冷たさのために、長い間にかみしめた苦しみがいつか身についてしまい、その苦しみをむしろ「いとしく」思い、その「苦しみがなければ一層はかなく」さえ思うようになった。それは「命の糧にも等しいほどな」ものになった。それを自分に苦しみを与えてくれている当人は少しも気づいていない。」(二二頁)と。堀辰雄は、この日記の女性の苦悩のくり返しの叙述をもてあましたようである。心とうらはらの態度ばかりをとってしまう道綱母を見ていると、こういう考え方もできることをおもしろく思い、共感をもって読んだ。

天禄三年(九七二)、道綱母も三十七歳ほどになった正月は、今年、天下に憎き人ありとも、思ひなげかじなど、しめりて



思へば、いと心安し。「第一三九段」（一八一頁）

と安定した心境を示している。多くの研究家は、愛の対象の兼家にひたむくことをやめ、その喪失すらのりこえる愛の方向へと転移したと述べ、また、道綱への母性愛が生まれてきたのだとも説いている。つまり、その「愛」は、愛されようとする受動的なものではなく、自らすすんで、夫や道綱を愛そうとする能動的な性質のもので、彼女の心は内面的な成長を遂げたのである。それまでの彼女は兼家が寄せてくれる以上の愛情を期待していた。その期待を、愛する者への「愛」に昇華させたのである。言葉通り、「道綱母」の座に自らを落ち着かせた作者は、やすらかな明日を志向しつつ生きていったにちがいないと私は信じている。

## おわりに

道綱母が綴ったこの『蜻蛉日記』は、異常な環境や体験を描いた日記ではない。人並に歎き・憂え・嫉み・悦び・羞じる一人の女性の素直な心の記録である。道綱母は平安時代の女性である。一夫多妻の時代に生きた彼女の終生の望みは、夫婦の結合を真に意義あるものにしたかったようだ。しかし愛情というものは、理性的な判断によって調節できるものではない。この問題は、古今東西、繰返される愛の苦悩である。

この真実のドキュメントを閉じた今、私は道綱母に羨望さえ感じた。自己の体験を、偽りなくあるがままに書こうとした情熱、それは称賛すべきものだと思う。

『蜻蛉日記』に見られる作者の生き方』という漠然としたテーマのために、研究の方法は暗中模索の日々が続いた。そしてどうにか辿り着いたものの、原文とのにらみ合いが、また長い間続いた。結局、三巻すべてを納得できるまで熟読するところまでにはいかなかったことは心残りである。しかし、道綱母の自叙伝『蜻蛉日記』は、「生きる」という意味を繰返し繰返し考えさせてくれた私の大好きな作品である。道綱母が、「愛する愛」を自覚（体験）して内面的な成長を遂げたように、私も、常に前向きな姿勢で、自分の存在を意識できるように生きていきたい。そして私は、もっともっと『蜻蛉日記』を精読して、女性の立場から道綱母の心をさらに深く追求していきたいと思っている。

## 参考文献

- |                      |      |
|----------------------|------|
| 柿本奨校注 『蜻蛉日記』         | 角川文庫 |
| 喜多義勇 『全講蜻蛉日記』        | 至文堂  |
| 次田潤、大西善明 『かげろふの日記新釈』 | 明治書院 |
| 清水文雄 『王朝女流文学史』       | 古川書房 |
| 今井卓爾 『平安時代日記文学の研究』   | 明治書院 |
| 宮崎荘平 『平安女流日記文学の研究』   | 笠間書院 |
| 伊藤博、宮崎荘平 『中古女流日記文学』  | 笠間書院 |
| 岡 一男 『道綱母』           | 有精堂  |
| 『日本文学研究資料叢書・平安朝日記1』  | 有精堂  |
| 『国文学・解釈と教材の研究二巻、十号』  | 学燈社  |

『国文学・解釈と教材の研究十三巻、十号』 学 燈 社  
鈴木一雄編 『学習古語辞典』 旺 文 社

〔評〕

『蜻蛉日記』は大作である。兼家との愛の実相を忠実に、しかも読むひとに「めづらしきさま」になるように記述した作者に対する保沢さんの関心は大きい。

色好みの夫兼家に対する作者の愛の苦悩・焦燥から生まれた「ものはかなさ」の心情を、十数例の引用文を挙げて論証し、それが作者の人生観の根源であり、「ものあはれ」や「無常」と同質であることを指摘した点は優れている。また、作者の宗教への接近は決して謙虚な求道ではなく、それは、物詣ごとく外界に展開する風物への感興が、長いあいだ硬直した作者の感情をしだいに氷解させ、作者が改めて兼家への愛の確認と現実の静観へと導かれていったためであると説いているのは新鮮である。

兼家の独占を願う作者の受動的な愛が次第に信頼と敬愛に変容し、同時に、道綱の母という能動的な愛に昇華してゆく過程の考察は無理がなく興味深い。兼家に対する愛の表現が、誇り高い作者の自我のために真情とはうらはらな態度でふるまう心理的な矛盾について、保沢さんは、同性の立場から十分な理解と共感を示している。しかし、純粹で潔癖な作者の人柄は少女時代の社会的環境による、と略記しているのはもの足りない。作者の資質に関係のある親近者や文学的教養基盤について見逃しているのは惜しまれる。

保沢さんの論文は、文字もていねいで読みやすく、参考資料や原

作をよく読みこなした真面目ですなおな作品だと思う。保沢さんが、道綱の母の生きるさまを通して「女性の愛のありかた」について多様な示唆を得たことを私は喜んでいる。

野 崎 アサエ